

## 大学教育におけるボランティア実習の意義についての一考察

上條 秀元

### 要旨

本稿は大学教育におけるボランティア科目の意義を、ボランティア実習の意義を中心として、明らかにしようとするものである。

はじめに、大学教育におけるボランティア科目開設の全国的な動向と背景、ボランティア科目開設の意義について考察した。次いで、宮崎大学の教養教育におけるボランティア科目の実践事例に基づき、ボランティア実習の意義について考察した。

学生へのアンケートと報告書の分析により、ボランティア実習が有意義な体験の機会となっているとともに、今後のボランティア活動への自身や意欲の形成にも寄与していることが示された。

### Significance of Practice on Volunteer at the University Cultural Education Hidemoto KAMIJO

### Abstract

This paper intends to make clear the significance of subject on volunteer ,especially,the significance of practice,at the university cultural education.

First,I considerd national tendency of opening subject on volunteer and the background. Secondly, analyzed the practical case of Miyazaki University.The answers to questionares and reports proved the significance of the practice.

**Key Words:**Volunteer Education,Practice on Volunteer

### はじめに

近年、大学教育において、ボランティアに関する科目（以下、「ボランティア科目」とする）を開設する大学が増加している。文部省の調査によると、ボランティア科目を開設している大学は、平成7～10年の4年間に30大学から102大学へと3.5倍近くに達している。この内、国立大学は5→14大学、公立大学は1→11大学、私立大学は24→77大学であり、数の上では、私立大学の増加が著しい。<sup>1)</sup>

このような動きの背景は、第1にボランティア活動への国民の関心の高まりをあげることができよう。

財団法人内外学生センターの調査による

と、ボランティア活動を「現在、している」学生は7.2%、「以前、したことがある」学生は33.5%、合わせて40.7%の学生が活動経験を有している。<sup>2)</sup>

第2に、ボランティア活動に対する社会の評価が高まり、その実績を評価する気運が広がりつつあることである。

第3に、平成3年の大学設置基準の改正を契機とする大学のカリキュラム改革の動きである。この中で、授業において学生の主体的・能動的な取り組みや実体験の機会を設ける取り組みが広がりつつある。このことが、有意義な体験の機会となるボランティア科目の開設を促していると言えよう。

ボランティア科目の意義については、次の

2点<sup>3)</sup>が指摘されている。

一つは、大学教育における地域の教育力の活用—大学教育の囲い込みから社会の活用へ—ということである。

教養教育の理念・目標としては「課題探求能力」の育成が重要であるという観点に立ち、これらの能力を育成していくためには、「大学が学生を教室の中に囲い込むのではなく、ボランティア活動への参加やインターンシップへの参加のように、学生が社会の中で、具体的な活動や体験を通じて学ぶようにすることが、効果的である。」また、学生の社会性の涵養にも効果的である。

第2に、大学の地域社会への貢献ということである。

「大学は、学生のボランティア活動を大学教育の一環として支援していくことにより、大学の教育研究の成果を地域社会の人々に還元することができる。」一方、地域社会にとっても、「専門性をもった人材を地域社会の活動に活用することができる。」

宮崎大学では、このようなボランティア科目の意義に鑑みて、教養教育検討委員会での協議を経て、平成10年度に新規に選択教養科目「現代社会とボランティア」を開設した。

以下、この科目を担当した立場から、ボランティア実習の意義を中心として、大学教育におけるボランティア科目の意義について考察する。

## 1 ボランティア科目開設に当たっての観点

ボランティア科目の開設に当たり、次のような観点でカリキュラムを編成した。

### ①ボランティア活動へのきっかけづくりを図ること

まず、ボランティア活動へのきっかけづくりを図ることを重視した。このため、授業の期間中に5日間以上のボランティア実習を義務づけた。この実習が有意義な機会となるよ

う、実習先の選択のための情報提供や相談活動を積極的に行うとともに、実習の体験発表（中間発表と最終発表）による相互啓発、レポートの作成による自己評価などを位置づけた。また、社会人講師の講義により、ボランティア実習への意識啓発を行った。

### ②ボランティア活動分野の多様化を踏まえること

第2に、近年におけるボランティア活動の多様化の動きを踏まえ、福祉の分野以外の幅広い分野を視野に入れた内容編成にした。このため、基調講義の中で、多様化の動きについて解説するとともに、社会人講師も、福祉、保健、環境、国際交流、青少年教育などの分野から依頼した。

実習の分野も、福祉の分野に限定しないで、学生の関心に即した選択が出来るよう情報提供等を行った。

## 2 カリキュラムの特徴とボランティア実習の位置づけ

### (1) カリキュラムの特徴

カリキュラムの特徴は、第1に、期間中に5日間以上（または20時間以上）のボランティア実習を義務づけたことである。実習先は、学生自身が選定し、学生が相手の機関と交渉することを原則とした。一方で、既に入手した実習先についての情報提供や相談機関に関する情報提供などにより、実習先選定への援助を行った。

第2に、生涯学習との関連を重視した。このため、授業の冒頭に「生涯学習社会とボランティア活動」の講義を位置づけるとともに、報告書に自己評価の項目を入れることなどを通じて、実習の中で学生が自ら高まるよう配慮した。

第3に、ボランティア活動の経験豊かな社会人講師による指導を重視し、活動分野を考

慮して、数名の講師を委嘱した。

第4に、実習を実のあるものとするために、発表会を実施し、報告書の提出を義務づけた。

実習を開始するに当たっては、所定の様式による計画書を提出させた。また、実習の成果を報告書としてまとめることを義務づけ、その様式も指定した。その中には、活動日誌、活動の評価（自己評価－姿勢の変化、活動の中で果たした役割等－、活動を通して学んだこと、感想・意見、今後のボランティア活動への抱負）などが含まれる。

また、他の学生の実践から学ぶことを意図して、実習の体験発表（中間発表と最終発表）を行った。

参考までに、平成11年度の授業の概要を示そう（次頁）。

## （2）授業運営の実際

授業の運営に当たっては、ボランティア関係機関等との連絡を図り、相談への対応の依頼、受け入れの打診などを行った。

また、オリエンテーションを重視し、履修の手引きなどを通じて、学生が主体的に授業に参加し、実習に取り組めるよう配慮した。オリエンテーションの結果、平成10年度は、当初100名を越えた学生の中から、43名が受講し、42名が修了した。また、平成11年度は30名が受講し、26名が修了した。

## （3）ボランティア実習の進め方

学生が実習先を選択した方法は、凡そ次の4つの方法に整理される。

### ①担当教官や社会人講師からの情報提供

まず、担当教官や社会人講師からの情報提供がきっかけとなって、実習先を選択したケースである。担当教官からの情報提供としては、青少年教育に関するボランティア活動の情報が特に有効であった。

### ②相談機関に対する相談

次に、相談機関、特に宮崎市ボランティアセンターのコーディネーターに相談し、実習先を紹介していただく学生も少なくなかった。この場合は、福祉や保健関係の機関を紹介していただくケースが多かった。

### ③友人や先輩等からの情報

第3に、友人や先輩等から得た情報により、選択したケースである。

### ④その他

以上の他、数は少ないが、現在ボランティア団体等に属して、継続的に行っているケースもあった。

学生が選んだ実習先は、凡そ次の5つの分野に分けることができた。

- ①福祉（老人福祉施設でのボランティア活動、福祉バザー等と結びついた展示活動の運営）
- ②保健（老人保健施設でのボランティア活動）
- ③環境（イベントと結びつけたデポジットなどの環境保護活動）、
- ④国際交流（国際交流団体の行事への協力）
- ⑤青少年教育（少年自然の家におけるボランティア研修と実習、青少年体験活動の指導・援助、養育施設における子供のお世話や指導、幼児を対象とする公演活動）

以上の中で、青少年教育に関するボランティア活動の参加者が多かったが、これは受講生の中で教育文化学部の学生が多かったことも影響していると思われる。次いで、福祉、保健の分野が多かった。

## 3 ボランティア科目の意義 ー特にボランティア実習との関わりでー

次に、ボランティア科目の意義を、特にボランティア実習との関わりで明らかにしよう。

## 平成11年度教養教育科目「現代社会とボランティア」の概要

単位数：2単位  
対象学年：2・3年

実施時期：前期  
実施時間：火曜日 7・8時限

## 授業のねらい

近年、ボランティア活動に関する人々の関心が高まる中で、活動の分野は社会福祉の分野のほか、青少年教育、伝統文化の保存・継承、自然保護、保健・医療、災害救助、国際交流など、多様な分野にひろがりつつある。

この授業では、受講者自身の継続的なボランティア体験活動への指導を中心に据えて、実践的な指導者による講義、活動計画の作成、個別ガイダンス、体験発表への指導などを行い、ボランティア活動についての正しい理解と実践能力を培うことをねらいとする。

## 授業計画

回	期日	テーマ	指導者
1	4/13	オリエンテーション	担当教官
2	4/20	生涯学習社会とボランティア活動 ビデオ視聴（ボランティア活動について）	担当教官
3	4/27	ボランティア活動の意義・内容と進め方（公開授業）	宮崎県ボランティアセンター所長
4	5/11	施設におけるボランティア活動の進め方（公開授業）	老人保健施設グリーンケア学園木花事務次長
5	5/18	環境保護に関するボランティア活動の進め方（公開授業）	大淀川環境基金実行委員会事務局長
6	5/25	国際協力に関するボランティア活動の進め方（公開授業）	宮崎国際ボランティアセンター代表
7	6/1	青少年のボランティア活動の意義と進め方（公開授業）	宮崎県教育委員会生涯学習課長
8	6/8	活動計画の作成と提出	担当教官
9	5/15	ボランティア活動の実際（個別ガイダンスと自己評価）	担当教官
10	5/22	ボランティア活動の実際（個別ガイダンスと自己評価）	担当教官
11	6/29	ボランティア活動の中間発表と評価	老人保健施設事務次長 担当教官
12	7/6	ボランティア活動の実際（個別ガイダンスと自己評価）	担当教官
13	9/7	活動体験の発表と評価（1）（公開授業）	老人保健施設事務次長 担当教官
14	9/14	活動体験の発表と評価（2）（公開授業）	宮崎県教育委員会生涯学習課長 担当教官

## (1) 学生による授業評価

平成11年度の授業の最後に行ったアンケートによると（注 回答者は22名）、受講動機で特に多かったのは、「ボランティア活動に関心があったから」（68.2%）である（図1）。「ボランティア活動を体験できるから」と答えた学生は約4割であり、少なからぬ学生が実習に対する期待感を抱いて、この授業に参加している。また、約4人に1人が「友人等に

すすめられたから」（27.3%）と答えている。

過去のボランティア活動の経験は、「行ったことがある」（22.7%）、<sup>4)</sup>「現在行っている」（40.9%）を合わせて約6割の学生が活動経験がある。

次に、社会人の講師に指導を受けたことについては（表1）、ボランティア活動に対する理解を深める上で「大変役に立った」が59.1

図 ボランティア科目の受講動機（複数回答）

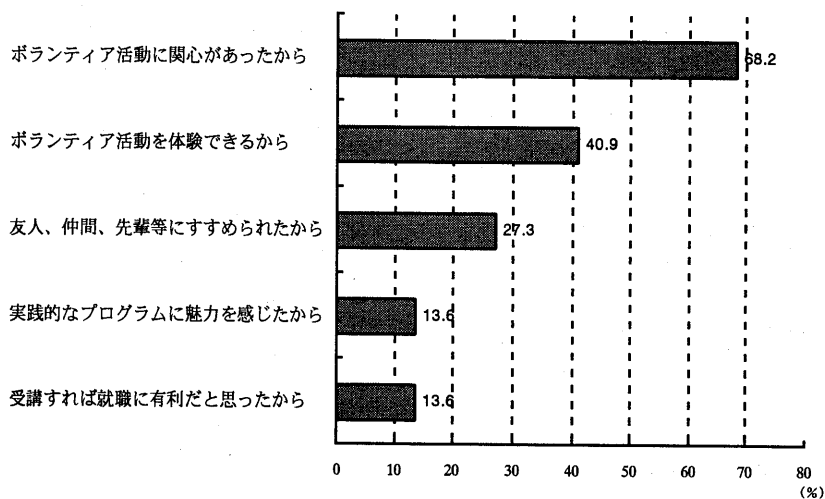


表1 社会人の講師に指導を受けたことについて

40.0%であり、少なからぬ学生が高く評価している。

表1-1 ボランティア活動に対する理解を深める上で

項目	割合 (%)
大変役に立った	59.1
少しは役に立った	40.9
あまり役に立たなかった	0.0
まったく役に立たなかった	0.0
合計	100.0

## (2) ボランティア実習の成果

### ア 学生へのアンケートから

それでは、ボランティア実習はどのような成果があったであろうか。

前述のアンケートによると、実習を行ったことに関しては、すべての学生が「大変良い経験になった」と答えている（表2）。また、今後同様のボランティア活動に参加することについては、「是非続けたい」が77.3%、「いずれ機会があったら参加したい」が22.7%で、すべての学生が参加を希望しており（表3）、この授業のねらいの一つであるきっかけづくりが一定の成果をあげることができたことが示されている。

さらに、実習の発表の機会を設けたことについては、約7割の学生が「大変参考になった」と答えている（表4）。また、「少しは参考になった」が31.8%で、すべての学生が参考になったと評価している。

表1-2 ボランティア活動をすすめる上で

項目	割合 (%)
大変参考になった	60.0
少しは参考になった	40.0
あまり参考にならなかった	0.0
まったく参考にならなかった	0.0
合計	100.0

、「少しは立った」が40.9%である。また、ボランティア活動を進める上で「大変参考になった」が60.0%、「少しは参考になった」が

表2 ボランティア実習は良い経験になったか

項目	割合 (%)
大変良い経験になった	100.0
少しは良い経験になった	0.0
あまり役に立たなかった	0.0
まったく役に立たなかった	0.0
合計	100.0

表3 今後同様のボランティア活動に参加したいか

項目	割合 (%)
今後とも是非続けたい	60.0
いずれ機会があったら参加したい	40.0
あまり参加したいとは思わない	0.0
今回限りにしたい	0.0
合計	100.0

表4 体験発表の機会を設けたことについて

項目	割合 (%)
大変参考になった	68.2
少しは参考になった	31.8
あまり参考にならなかった	0.0
まったく参考にならなかった	0.0
合計	100.0

## Ⅰ 報告書の分析

### (ア) 分析の視点

次に、学生一人一人は実習をどう評価しているだろうか。提出された報告書から、活動のタイプの異なる3つの実習先に限定して、実習の成果と課題を探ろう。1つは、老人保健施設でのボランティア活動、第2に、青少年の自然体験活動にスタッフとして関わるボランティア活動、第3に、幼稚園や保育園における音楽の公演活動である。

分析の視点は、以下の通りである。

第1に、実習に参加する中で学生の意識等にどのような変化が生じたか。

第2に、実習を通して学んだことは何か。

第3に、今後、ボランティア活動に取り組む自信や意欲をもつことが出来たか。

第4に、活動の受け入れ体制や指導体制について、学生はどのように評価したか。

### (イ) 実習に参加する中での変化

まず、実習に参加する中で、学生の意識等にどのような変化が見られたであろうか。変化が特に明確に示されたのは、老人保健施設でのボランティア活動と子供の体験活動のスタッフとしてのボランティア活動であった。これは、ボランティア活動の主な対象者が期間を通じて同じで、しかも少人数であったことも影響していると思われる。

まず、老人福祉施設でのボランティア活動について見てみよう。

### ○老人保健施設でのボランティア活動

初体験の学生が多かったため、「最初はとも緊張して、どうすればよいのか分からなかった。」、「初めは何をすれば良いのか分からず、おろおろしていた。」、「お年寄りとお話する話題が無くて困った。」などの感想が見られる。しかし、「回を重ねる毎に慣れていって、自分から積極的に関わられるようになった。」、「最後の方では数人の方の名前を覚え、スキンシップをとりながら会話ができた。」、「あまり福祉に対する興味が無かった以前に比べると、高齢者に対する理解や目の向け方が変わったと思う。」というように、意識や姿勢の変化が認められる。

では、5日間の実習の間に、具体的にどのような変化が認められるであろうか。学生一人一人によって当然相違があるが、ここでは1人の学生の感想を中心として分析する。

まず、初日は「初めは何をすれば良いのかわからず、おろおろしていた。」というような状態であった。むしろ、「お年寄りの方々から、いろいろお話していただいて良かった。」というように、高齢者の心配りによって救われている。

2日目は、少し雰囲気慣れ、ボランティアとしての姿勢等について理解しはじめる。

例えば、高齢者のペースに合わせてゆっくり歩くことや高齢者のリハビリと介助（援助）とのかね合いである。後者については、高齢者本人から「フラフラ歩いているけど助けてもらいたくてあるいているんじゃない」と諭されることによって教えられている。

3日目は、高齢者の名前を覚えることによって、サービスがスムーズに出来るようになる。また、落ち着いて周りを観察できる心のゆとりも生まれている。

「デイケアの人たち（15人くらい）の名前をだいたい覚えたので、食事やおやつを配るとき、スムーズにできた。」

また、バスでの送迎に付き添った時に高齢者の生活環境を見て、高齢者への理解を深める。また、話の話題が見つかった。

「バスでの送迎に付き添った時に、お年寄りがどのような環境で生活しているのかわかって、今までよりももっとお年寄りのことが理解できたような気がした。お話し話の話題も見つかった。」

4日目は、高齢者と気軽に話しが出来るようになり、話がはずんだ。

「お年寄りの方々と話をするとき、話題がいろいろ見づかり話がはずんだ。お年寄りが積極的に話してくれる話題を見つるのが大切だと分かった。」

5日目は、高齢者一人一人の理解が深まり、活動がよりスムーズに出来るようになる。

また、高齢者の生活環境についてもこれま

でとは違った視点から見て、新たな発見をしている。

「5日目になったら、お年寄りの顔と名前も一致するし、性格も何となく分かってきたので、活動がやりやすかった。お年寄りを送っていくときに、お年寄りの住んでいる木花地区の住宅が車椅子で移動しやすく作られていたり、道路の段差を少なくしたりしていることに気がついた。今までは何も気にとめていなかったが、こういう活動をしてみて、初めて大切なことだと実感した。」

「どんな活動をするにも、心を込めて、一生懸命しなければ相手には伝わらないということが改めて分かった。」

#### ○青少年体験活動に関わるボランティア活動

次に、青少年の体験活動にスタッフとして関わったボランティア活動を分析しよう。

全体として、「私の中で子どもを見る目が変わった」と言うように、3日間の活動の中で大きな意識の変化が認められる。また、初めは指導したり何かをしてあげようという気持ちが先に立ってしまったが、「子ども達にまかせられるところはまかせろ」とか、高学年の子供が下の子の面倒を見るようにすることによって、子供の間に自主性や教育力が生まれた。このことが、教育や指導の在り方についての良い体験の機会となっている。

「私の役割は、何かを教えるのではなく、ただ一緒にいて楽しむだけだったけれど、私の中で子どもを見る目が変わったと思う。みんなそれぞれ自分をどこかで出していて、それを見つるのが、私たちの役割だと思った。」

「はじめのうちは、自分はスタッフだから楽しんじゃいけないんだとか、子ども達が楽しめるようにしないといけないという気持ちが強すぎて行動が硬かったが、子ども

達と一緒に遊ぼうと考えたら、頭も柔軟になり体も動くようになった。」

「時には楽しく子供達と同じように行動し、時には厳しくつきはなし、先生のようにけじめをつける。その両方をうまく使いこなし、私自身、以前の楽しいだけとは違う姿勢になった。」

では、3日間の活動の間に、具体的にどのような変化が認められるであろうか。

まず、初日は「小さい子ばかりに話しかけてしまった。」「自分の近くに座っている子どもとばかり話してしまった。」というように、一部の子どもとしか対話が出来ない状態であった。特に、「小学校低学年から中学生への接し方が難しく、あまり会話が出来なかった。」という状態であった。

一方、手を出し過ぎたことへの反省も出されている。

「私が多くの場面で手を出しすぎた。高学年の子ども達に班をまとめてもらおうと思う。」

2日目は、子ども達にまかせられるところはまかせるという方法に変えた。そうすることによって、「上の子が下の子を気遣う」といった子ども達の中に新たな教育力が生じたことを認めている。

「子ども達にまかせられるところはまかせ、全体を見ていくように気を付けた。子どもの中で連帯感が少しずつ生まれ、上の子が下の子を気遣う光景が見られた。」

3日目は、子ども達が「1人で何でも出来る力を持っている」ことを発見している。また、子ども達が短期間に仲良くなれることも発見している。

「子ども達が、異年齢の8人でも、短期間で仲良くなり、協力しあうことができることを知れて良かった。」

人となじめなかった子どもとの対話など、

すべての子どもとの信頼関係を培えたことも収穫と言える。

「なかなか人となじめずにいた子が、話しかけてくれた。自分からはほとんど話をすることはないけれど、班の一員となって自然にとけ込んでいた。」

これには、担当した子どもの数が少なかったために、一人一人に目が行き届いたことも影響していると思われる。

### ○幼稚園等での音楽の公演活動

以上の2つのケースに比べて、保育園や幼稚園での音楽の公演活動の場合は、それほど明確な変化が示されていない。これは、各回毎に相手が違うことが影響していると思われる。しかし、子ども達が生の演奏をとっても喜び、体全体で反応していることから、自信や意欲を深めたり、子ども達がどのような曲を求めているかについて、活動を進めるごとに理解を深めている。

### (ウ) 実習を通して学んだこと

では、学生は実習を通してどのようなことを学ぶことができたであろうか。

### ○老人保健施設でのボランティア活動

まず、老人保健施設でのボランティア実習からは「今回のボランティア実習で介護がどれだけ大変かが分かった。」という感想が述べられている。

そして、次に示すような視点を学んでいる。

第1に、介護サービスと自助の境目をよく見極めることである。

「最初は気を回しすぎて、お年寄りの方々のリハビリテーションにつながる行為をじゃましてしまうことが多くあった。お年寄りの介護をする場合に、どこまでをお手伝いして、どこまでを自分でやっていただ



くかという境目をよく見極めなければいけないことを学んだ。」

第2に、一人一人の状態に応じて、話し方や接し方を変えることである。

「施設に来られる方はどこかに障害をもっている方々だが、一人一人その度合いも種類も違っているので、話し方や接し方を変えることを学んだ。言葉を発するのが不自由な方には、しっかり目を見て、顔を近づけて少しの音でも聞き逃さないようにした。耳の不自由な方とは、文字でコミュニケーションを図った。」

第3に、常に高齢者の立場に立って考え、行動することである。

「お年寄りと話すにしても、バスの送迎にしても、常にお年寄りの立場に立って考え、行動することが大切であることを学んだ。」

「痴呆になったからといって、他の人と違った接し方を極端にすると、相手もそれに気づき、悲しい表情を見せるということです。」

第4に、高齢者に対して、常に敬意を払って接することである。

「お年寄りの方とどう接すればよいか、大分わかった気がする。お年寄りは目上の人で人生の先輩であるということを忘れず、常に敬意を払って接することが、当たり前前のことではあるが、とても大切だと学んだ。」

#### ○青少年体験活動に関わるボランティア活動

次に、子供の体験活動に関わるボランティア活動「フロンティアハート in ひむか」のスタッフとしての活動のレポートを分析しよう。

一つは、子ども達が生きる力などを持っていることの発見である。そして、それらを引き出すことが自分達の役割であると認識して

いる。

「生きる力や思いやりの心、感動する心を子どもたちがもっている。それらを引き出すのが私たちの役割なんだなと思った。」

第2に、「全てに手を出すのではなく、まかせられる所はまかせる」というように、子供との関わり方について学んだことである。やっではないけなない時には「だめ」ということの大切さも学んでいる。これには、他のボランティアスタッフの子ども達への接し方から教えられることが多かったようである。

「全てに手を出すのではなく、まかせられる所はまかせ、子ども達がうまく出来ないことに対して適切に対応することの大切さを学んだ。」

「子どもに嫌われてもいいと割り切つて、やっではないけなない時には‘だめ’ということが大切と感じた。子どもも、ちゃんと言う人にはついていくことがわかった。お互いの信頼関係はとても必要である。」

「他のボランティアスタッフの子ども達への接し方を見て学ぶ点が多かった。」

第3に、子ども達の間で、「年齢の上の子が下の子のめんどうを見る」といった教育力の形成を発見したことである。

「活動していくうちに、自然と年齢の上の子が下の子のめんどうを見るようになっていき、大人が『こうしなさい』『あしなさい』と言わなくても、こういう機会があれば、いろいろなことを子ども達から吸収することがわかった。」

第4に、子ども達一人一人に目配りして指導することの重要性と難しさを体験したことである。

「打ち解けない子どもとの距離を短くすることに時間がかかった。」

「子どもの個性はそれぞれだ。そんな子ども達一人一人に目を配り、細かい指導を

していくことは難しい。しかし逆に人間を相手にしているからこそ、毎日が違う生活であり、喜びも普通の人の倍以上味わうことが出来るんだと思う。」

「10名を、それも異年齢の子供たちをまとめていくことの難しさ。一人一人に対する言葉がけや接し方の違い。駄々をこねる子に対するつきはなし方、叱り方、フォローの仕方。まだまだ難しいが、叱るだけでなく、その後成功体験へと導くことがとても大切であることがわかり、学ぶことが多かった。」

第5に、自分自身が楽しむことがボランティア活動を続けるために必要であることを学んでいる。

「ボランティア活動を続けるためには、自分がその活動を楽しまなければいけないと思った。そして、楽しいと思うためには、背伸びをしなくて、自分のできる範囲のことから始めることが大切だと痛感した。」

第6に、ゲームの効果的活用の意義を理解している。

「ゲームを効果的に使うことで、子どもの緊張を和らげたり、仲間づくりに役立つことがわかった。」

第7に、自分自身が成長させられたという感想も出されている。

「今回、私が学んだ方が多かった。」

「ボランティアというと、どうしても『何かをしてあげる』という偽善的なイメージがあったけれど、それが全くの間違いだったと気付いた。人や自然と触れ合うことで成長させられるのは自分の方だった。」

### ○幼稚園等での音楽の公演活動

次に、幼稚園等における音楽の公演活動では、まず、子供たちのするどい反応に驚かされている。

「子ども達は思ったより反応がするどか

った。」

「自分たちで持ちかけた活動なので、演奏することに責任を感じ、また、演奏する喜びなどを感じた。」

「1歳から3歳の子どもまでいて、どのような曲が喜ばれるかわからず、ディズニー系でまとめてみた。すると園児達は大喜びで、終わる時に‘もう終わり?’と言われた。とてもうれしかった。」

「園児達は私たちを心から歓迎してくれて、しかも音楽を聴くのみでなく、踊ったり、手拍子をしたりと体で表してくれるので、もっと堅苦しくなく、なごやかに楽しんでもらえたらと思った。」

「園児から‘ポケモンやって’という声があがった。今度行くときは、ポケモンをマスターしていきたい。」「もっとアニメソングを入れると良かったかなと思った。」

「園児も楽しそうだったし、何より演奏する私たちが楽しかった。」

### (エ) 今後のボランティア活動への自信や意欲の形成

次に、今後ボランティア活動に取り組む上での自信や意欲の形成がなされたかについて分析しよう。

#### ○老人保健施設でのボランティア活動

まず、老人保健施設でのボランティア活動では、高齢者との関わりについて学ぶことが出来たことが、今後の取り組みへの自信となっている。そして、このような施設で積極的に活動したいという意向を示した学生が多い。一方で、施設での活動に限定しないで、高齢者との交流や様々な年齢の人達との交流を進めたいという意向も見られた。

「もっと介護に関するいろんな知識を身につけ、機会を積極的に得るようにした

い。」

「お年寄りの方と一緒に楽しめるような活動を続けたい。一方的に何かをするのじゃなくて、一緒に楽しみたい。そこから、何か相手に役立つことがあればいいと思う。」

「今回の活動を通して、お年寄りとのかわり方を少しではあるけれども学ぶことが出来たので、それを生かして、様々な活動をやってみようと思う。子どもからお年寄りまで、様々な年齢の人たちと接していきたい。」

#### ○青少年体験活動に関わるボランティア活動

次に、青少年の体験活動に関わるボランティア活動では、今後自分自身が学べる機会や有意義な経験を得る機会を求める意向が見られた。」

「今後も自分が学べる機会があればどんどん参加していきたい。」

「私は自分を一步でも前進させられるようにいろんなことに積極的に挑戦していきたい。」

#### ○幼稚園等での音楽の公演活動

次に、幼稚園等における音楽の公演活動では、今後も続けて、さらに経験を重ねていきたい、活動対象は、老人ホーム等にも広げたいなどの意向が見られた。また、この経験が音楽の勉強への刺激剤にもなっている。

「今回のボランティア活動を通して、沢山のことを学び、経験をしました。もっと色々な人と触れ合い、経験を重ねて、今後も続けていこうと思います。」

「音楽をもっともっと勉強したいと思った。もっとすてきな音楽、生の演奏を子どもたちにしてみたい。」

「今後は保育園、幼稚園に限らず、老人ホーム等にも行きたい。そこにいる人たち

が喜んでくれたり、一緒に歌ってくれたりするのが何より楽しみだ。」

#### (オ) 受け入れ体制・指導体制について

最後に、受け入れ体制や指導体制については、どのような評価をしているであろうか。

##### ○老人保健施設でのボランティア活動

職員は学生に対して、最初からあれこれ指示するというのではなく、むしろ、学生自身が何をすべきか、自分で見つけて行動するように仕向けている。また、言葉で教えるというよりは、実践して教えることを重視している。一方で、学生に誤りがあれば、その都度遠慮なく指摘している。

これらの対応が、学生にとって良い勉強の機会となった。特に、職員の高齢者への接し方から大いに教えられている。また、職員のレクリエーション指導などの指導力に対して、尊敬の念を抱いている。

例えば、

##### ・全体的な感想

「自分が何をすればよいのか、積極的に見つけて行動しなければならず、戸惑ったところもあったが、施設の人たちやお年寄りの方々の暖かい対応のおかげで、少しはお役に立つことが出来たのではないかと思う。」

##### ・職員から教えられたこと

「私たちは初めての体験で何をしていたかも分からなかったけれど、職員の方々は言葉で教えると言うよりも実践して教えてくれたので、やりやすかった。お年寄りの方をしっかりと尊敬した接し方はすばらしいと思ったし、見習いたいと思った。」

「ボランティアの指導を担当する職員を筆頭に、現場ならではの鋭い指摘がたくさんあり、5日間の活動の中でもスキルアップができたと思う。」

「歌に合わせて指先の運動をしたり、体を動かしたりしてさりげなくリハビリをしていたのが勉強になった。また、童謡を歌ったり、2時間があつという間に過ぎるレクリエーションの構成はすごいと思った。」「毎回いろんなゲームを考え出す職員の方はすごいと思う。また、色々な声を出すことによってコミュニケーションをとっていて、ゲームがとても楽しくなるよう努力されているのが勉強になった。」

「職員の方々はとてもあたたかく私たちを受け入れてくれて、私たちの悪いところは遠慮無くおっしゃってくれたし、私たちにいろんなお手伝いの仕事を遠慮なく頼んでくださったので、とてもよかったです。」

「今まで話をする時は椅子に座って話していたが、目線がお年寄りの方より高くなるので注意を受けた。話をする時は床にひざを突いて目線を低くして話し、‘お世話をさせていただいている’という気持ちで接しなくてはいけないことを学んだ。」

「事務長から皆に私語が多いという注意を受けてしまった。確かに私たちはちょっと固まって話をしてしまったのでいけなかったと思った。」

#### ○青少年体験活動に関わるボランティア活動

学生に対して、何も強制しないで、自由にさせながら、社会教育主事や教師が子供たちを指導する姿勢や方法から学習させている。また、反省会で誤りを指摘して改善を図っている。これらのことが、学生にとって良い勉強の機会を提供している。

「受け入れてくれた方々も、子ども達への接し方などについて強制はなく、私たちの自由にさせてくれて、困った時にサポートするという方法をとってくださったので、楽しく活動することができた。」

「幼稚園の先生や教育事務所の方が子ども

達と接している様子や反省会での意見を通して、学ぶべき所がたくさんあった。」

「教育委員会の先生方とお話を重ねながら、子供達への接し方も学んだ。やはり尊敬した。」

一方で、学生はプログラムの「詰め込みすぎ」について、一定の批判的見地も示している。（平成10年度）

「一日のスケジュールが少々多すぎるような気がした。」「活動の内容は充実していたが、あまりに詰め込みすぎて時間的ゆとりが欠けていたと思う。」「もう少し子ども達に考えさせる場面を与えられれば、なお良かったと思う。」

#### ○幼稚園等での音楽の公演活動

保育園や幼稚園では喜んで学生を受け入れ、公演をやりやすいような雰囲気づくりを図っている。このことにより、学生が気持ちよく、また意欲的に活動している。また、この機会に保育園や幼稚園の仕事の仕方が見ることができたことも、良い経験となっている。

「保育園、幼稚園の先生方は喜んで私たちを受け入れてくれた。夕飯、ジュース等をごちそうしてくれたり、焼き肉を食べにつれていってくれたり、本当に良くしてもらいました。」

「保母さんの実際の仕事を見ていて、学ぶものが多かった。」

#### まとめ

以上、ボランティア科目の1つの取り組み事例を分析する中で、その意義を考察した。

最後に、アンケートや報告書を通じて浮き彫りになったことをまとめてみよう。

第1に、この授業がボランティア活動へのきっかけづくりのための有意義な機会となっ

ていること、また、実習を通しての体験が今後の活動への自信と意欲を培っていることである。

第2に、有意義な体験をすることが、ボランティア活動の意義の理解や本人の人格的な成長という面でも有効であることが示された。

第3に、受け入れ体制や指導体制が、重要な役割を果たしていることである。これは、職員や指導者の適切なアドバイスや相手との接し方などから、大いに学ぶところがあったという学生の感想にも示されている。

一方で、本人の意欲や謙虚に学ぶ姿勢も重要である。この姿勢が初期の誤りを改め、活動の中で自ら成長をとげることに繋がっている。

前述のように、本稿で取り上げたケースでは、今後のボランティア活動への動機づけという所期の目的を達成する面では一定の成果をあげることができた。しかし、それが今後の実践にどの位結びつくかは未知数である。この意味で、5日間という限られた日程の実習がどの程度有効性をもつのかは、今後の研究課題である。

最後に授業の評価方法について触れておきたい。実習のような実践的なプログラムを組み込んだ授業においては、大学が授業評価で用いている共通の評価法では、必ずしも授業の成果や問題点を十分に把握できないと思われる。その意味で、今回のような独自のアンケートや報告書の分析が一定の有効性を有することが示された。また、今後は学生自身による自己評価を支援することも重要な課題と思われる。自己評価の視点に立った報告書の作成と提出は、この点でも有効な試みであったと言える。

## 注

- 1) 文部省高等教育局「大学におけるカリキュラム等の改革状況について」1999年10月、3頁
- 2) 財団法人 内外学生センター『学生のボランティア活動に関する調査』1998年3月、2頁
- 3) 文部省高等教育局『大学教育におけるボランティア活動の推進について』1999年3月、2～3頁
- 4) ここで、「過去のボランティア活動の経験」とは、「特定のボランティア活動を継続的（5日以上または20時間以上）に実践することを指している。
- 5) 老人保健施設は、高齢者のショートステイやデイサービスを行うことを目的とする施設である。学生は、ケアサービス、レクリエーションの手伝い、高齢者の話し相手等の活動に参加した。平成10年度は8名、平成11年度は5名の学生が参加し、5日間の実習を行った。

青少年の自然体験活動：「フロンティアハート in ひむか」事業とは、3泊4日で青少年に自然体験、宿泊体験、異年齢交流などの機会を提供する事業である。県教育委員会宮崎教育事務所が実施した。この事業に学生はスタッフとして参加し、幼児から中学生までの10名の子供を担当した。平成10年度は8名、平成11年度は7名の学生が参加した。

音楽の公演活動では、学生がアンサンブルを編成して、保育園や幼稚園に公演の話をもちかけている。この実習は平成10年度に行われ、参加した学生は3名である。

(2000年1月31日受稿、2000年3月10日受理)